

作者が自己の作品について何かを語ることにどれほどの意味があるのだろうか。

私の場合，“作品のテーマは何か。”と問われれば、それは漠とした暗闇の中、人間というよりは生物自体の不安、宿命、生命と物体とのゆき還り。等と言葉に出てくるものは、まことに気障で、観念的な面白味のないものになってしまう。それは作品を見てくれる人の自由をしばり、さまたげになるのではなかろうか。

何作もの積み重ねの中に“自己の語り。”をしてゆくよりしかたがないと思っている。

